

松井田町埋蔵文化財調査会報告書〈3〉

五 料 丙 小 竹 遺 跡

1993

松井田町埋蔵文化財調査会

「五料丙小竹遺跡」 正誤表

頁	行	誤	正
図版目次	12	14・15・16	15・16
1	15	8月19日	8月20日
7	7	セクション	エレベーション
14	4~5	内側プラン	内側プラン
15・16		図17	図11
23	27	西及び東	南及び東
24	集石遺構	集石遺構2	集石遺構1

松井田町埋蔵文化財調査会報告書〈3〉

五 料 丙 小 竹 遺 跡

1993

松井田町埋蔵文化財調査会

序 文

埋蔵文化財が文字資料のない時代の証左であり、また文献とともに歴史学の片輪として大きな位置を占めていることは何を待たないところであります。私たちの町においても近年の大規模開発に伴って数多くの遺跡が発見され、さらにはそれに携わることで地域の歴史をより身近に感じる方が増えていることは、牛両学習という点からも非常に意義あるものと言えるでしょう。東山道から中山道と、幹線による交流の中で築かれてきた本町の文化は、上信越自動車道の開通で新たな局面を迎えるようとしていますが、その根源には原始から古代に生きた私達の祖先の文化があったことを踏まえておく必要があると考えます。

さて、平成3年8月に発足した本調査会は民間の開発に伴う埋蔵文化財調査組織として活動してまいりましたが、このたび調査報告書の第3集を発刊することとなりました。ここでは縄文時代及び平安時代の遺構、遺物が出土しましたが、当地の碓氷川右岸での遺跡地としては初の検山例であり、同台地の遺跡分布ならびに対岸との比較においても重要なようかと思います。これらはふるさとの歴史解明の一助とするとともに、歴史教育の資料としてさまざまに活用してゆきたいと考えております。

最後になりましたが、発掘調査から本書刊行に至るまで多大なご指導、ご協力をいただいた関係各位ならびに調査に参加された方々に感謝を申し上げ、序文といたします。

平成5年3月

松井田町埋蔵文化財調査会

会長 武田 弘

例　　言

- 1 本書は小沢工業株式会社の工場等建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書である。
- 2 遺跡は群馬県碓氷郡松井田町大字九科字丙小竹 3,730 他に所在する。
- 3 調査は小沢工業株式会社の委託により松井田町埋蔵文化財調査会が行なった。
- 4 調査費は小沢工業株式会社の負担によるものである。
- 5 調査期間は、発掘調査（平成 3 年 8 月 20 日～平成 3 年 10 月 19 日
整理事業）平成 4 年 1 月 6 日～平成 5 年 3 月 31 日 である。
- 6 調査は発掘調査を水澤祝彦（調査会事務員）、整理事業を水澤と田口 修（同）が担当し、整理事業では小林節子、城谷正枝、廣瀬君江がこれに従事した。
- 7 本書の執筆、編集は水澤と田口が分担した。
- 8 打製石斧の実測とトレースは菅谷みのぶ氏にお願いした。
- 9 出土遺物、資料類は当調査会の委託により松井田町教育委員会が一括して保管している。
- 10 発掘調査及び整理事業においては以下の方々よりご指導、ご協力をいただいた。（敬称略）
伊藤節夫、伊藤正雄、上原富次、小板橋 崇、佐藤 靖、佐藤義一、須藤新一郎、千田幸生、
長谷川一郎、茂木寿雄、綿田弘実
- 11 発掘調査参加者（敬称略）
門屋さかえ、小池美恵子、小板橋昌仁、小林節子、佐藤友江、猿谷正枝、小沢すみ子、
野辺絹子、毛利ヨシ江、矢野由利子、岩井儀一、斎木恒男、野田達也

凡　　例

- 1 造構図の縮尺は 1：40、1：80 とし各図に記した。
- 2 造構図の方位記号は磁北を指す。
- 3 造構断面図中、基準線は海拔標高を、スクリーントーンは焼土部分を示す。
- 4 グリッドポイントは横軸（東西）—縦軸（南北）の順に表記してある。（図 2 参照）
- 5 遺物図の縮尺は 1：3、1：4、1：6 とし各図に記した。
- 6 遺物図のスクリーントーンは灰釉陶器施釉部を示す。
- 7 遺物観察表（）は推定値を示し、推定不可能な部位は記載していない。
- 8 遺物観察表の法量欄「底径」において、台部のつく器種は便宜上台部径の数値を記載した。
- 9 写真図版における遺物写真的縮尺は不統一であり実測図を参照されたい。
- 10 本文と写真図版の遺物番号は一致する。

目 次

序 文

例 言・凡 例

第1章 発掘調査に至る経緯 1

第2章 調査の方法と経過 1

I 発掘調査の方法 1

II 発掘調査の経過 2

III 整 理 作 業 2

第3章 遺跡の環境 3

I 地理的環境 3

II 歴史的環境 3

第4章 検出された遺構と遺物 7

I 縄文時代 7

II 平安時代 10

III そ の 他 22

第5章 ま と め 23

抄 錄

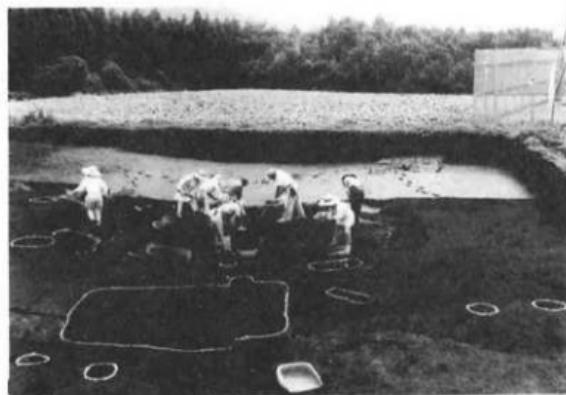
写 真 図 版

図版目次

図1	周辺遺跡の概要	4
図2	五料内小竹遺跡全体図	5・6
図3	1号集石	7
図4	1号集石出土遺物	8
図5	遺構外出土遺物(1)	8
図6	遺構外出土遺物(2)	9
図7	1号住居跡	10
図8	2号住居跡	11
図9	3号住居跡	12
図10	4号住居跡	13
図11	5号住居跡・6号住居跡	14・15・16
図12	1号住居跡出土遺物	17
図13	3号住居跡出土遺物	17
図14	2号住居跡出土遺物	18
図15	4号住居跡出土遺物	18
図16	6号住居跡出土遺物	18
図17	5号住居跡出土遺物	19
図18	遺構外出土遺物	19
図19	1号土坑・2号土坑	22

表 目 次

表1	整理作業工程表	2
表2	遺構外出土遺物観察表	9
表3	1号住居跡出土遺物観察表	20
表4	2号住居跡出土遺物観察表	20
表5	3号住居跡出土遺物観察表	20
表6	4号住居跡出土遺物観察表	21
表7	5号住居跡出土遺物観察表	21
表8	6号住居跡出土遺物観察表	22
表9	遺構外出土遺物観察表	22



平面精査作業風景

第1章 発掘調査に至る経緯

近年、上信越自動車道、上越新幹線、土地改良事業等の各種開発が県内外で展開され、これらに伴う埋蔵文化財発掘調査も毎年多く実施され、記録保存を中心とした保護対策が各地において進んでいる。

このような状況のもとで、松井田町においても厳しい調査体制の中で、多くの発掘調査が実施され、文化財の保護対策と、あわせてその有効的な活用についての方策も検討している。

平成3年3月、小沢工業株式会社より松井田町に対して松井田町大字五料地内の工場建設計画が提示され、該当地区における文化財の保護について、松井田町教育委員会との間で事前協議が行なわれた。これに伴い、該当地における遺跡等の分布状況について現地踏査（表面調査）を行ない、その把握に努めた。この結果、縄文時代から近世にわたる遺物の分布が確認された。これにより、開発予定地については遺跡として認識し、その保護対策の実施方法について、再度両者による協議が行なわれた。この結果、工事に先立ち、埋蔵文化財発掘調査を実施して遺跡の記録保存を行なうこととなった。

調査にあたっては、小沢工業株式会社よりの委託事業として、町教育委員会内に事務局をおく松井田町埋蔵文化財調査会が実施することとなり、8月19日より現地での埋蔵文化財発掘調査を開始した。

第2章 調査の方法と経過

I 発掘調査の方法

調査は、トレーナーによる遺跡の分布状況の把握と、これに基づき確認される遺構の広がりについて、表土除去面積の拡大による面的確認の方法により実施した。

はじめに、調査地区的位置把握と正確な記録資料の作成等の調査の便を計るために、調査区全体を1m単位で呼称する任意の座標軸（X-Y）で網羅した。これに基づき調査区全体を対象として、10mピッチのY軸方向のトレーナーを重機により掘削し、該当地内の遺構の確認に努めた。この掘削に際しては、基本層序に基づいて、遺構確認可能な浅間B軽石層の除去による確認と、関東ローム層上面での確認を基本として実施した。

このトレーナー調査結果に基づいて、遺構の分布が認められた地区を中心として、周辺の表土除去作業を慎重に進めて、遺構分布に基づく調査区の設定と調査面積の確定作業を行なった。

II 発掘調査の経過

調査区に磁北を基準としたグリッドによる杭打ちを行なう。10mピッチで重機によるトレーナー掘削を行ない、この設置で窓査又の西から北を通る溝を確認する。また、調査区東南を中心に対穴住居跡及びピットが多数確認される。

溝については、一部分の構造を行ない、浅間B軽石直下ではわずかに埋んだ状況が確認された。

しかし、降雨による水没で土層断面の崩壊が激しく、現場での安全対策から早急な埋め戻しが必要とされたために、各トレンチでの検出状況の記録作業の後に埋め戻しを行なった。

流路については自然地形の中の産物と考えられたので、一部の発掘とトレンチとの位置関係の記録を行ない、現場での安全面を考慮し、埋め戻しを行なった。また、住居跡及びピットの検出された地区については、その分布の広がりにあわせて周辺の表土を除去し、調査対象面積の確定を行なっていった。

調査区の表土除去拭張作業により、多数の遺構が確認され、遺構の一部は調査区域外にまたがって検出されたが、調査区域内にかかる部分のみを調査対象とせざるをえなかった。各遺構について遺構検出状況、遺物出土状況の作図及び写真撮影、観察記録等の詳細な記録作業を行なった。

III 整理作業

整理作業は平成4年1月より開始したが、5月以降9月までは人事異動及び事務所の移転、また残務整理等により中断を余儀なくされた。工程の概要については下表に示す。

表1 整理作業工程表

内 容		1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
遺 物	洗浄 清合 復元 測定 記入 測定 スコット 版下 レーベン 真版 写真 版下 工作 撮影 成形 成															
遺 構	原図 ト写 真版 下作 点一 作成 検査 成形															
原 横	遺物 遺本 観察 表文															
そ の 他														(校正・刊行)		



図版作成作業

第3章 遺跡の環境

I 地理的環境

本遺跡は群馬県碓氷郡松井田町大字五科字内小竹地内に所在する。北側は長野県境である碓氷峠頂部に端を発す碓氷川が安中市へと東流している。この右岸は雄冰川下位段丘と呼ばれる河岸段丘面が安中市まで続いているが、本遺跡はこの段丘上に位置し、標高は333～334mである。河川との比高は約30mを計り区域端より急傾に落ち込んでいる。碓氷川を隔てて対岸は中位段丘と呼ばれその北に迫る松井田丘陵までの間に旧中山道の道筋を辿る国道18号線と信越本線が並走し、関東と中部を結ぶ幹線のひとつとなっている。一方、南側は妙義山麓の緩やかな北傾斜が続き700m程より妙義山上への急斜面となる。西方800mでは妙義山西の裏妙義で沢を集める中木川が、また東方300mでは妙義富士より派生する小竹沢がそれぞれ碓氷川に流入し南西から北東の傾斜をもつ台地状地形を形成する。

当地域は河川を利用した水田、また主に傾斜地では桑園や果樹園などの畠地として利用されているが、近年の農業経営不振や人口の減少などから農地の軒元が徐々に進んでいる状況である。

II 歴史的環境

周辺で確認されている遺跡等を図1に示した。本地域での碓氷川右(南)岸の状況は調査例の少ないこともあり不明な点が多く、今後の資料の集積が待たれるところである。1は櫛文時代中期を中心とした遺物包含層及び住居跡と後期と思われる集石遺構が検出されている。6では櫛文後期の配石墓群、8では櫛文早期及び中期の住居跡が確認されており松井田丘陵南麓における縄文遺跡の様相を示す好資料である。9は径10mほどの円墳とされているが時期等詳細は不明である。五科地区で確認されている数少ない占墳のひとつである。4では奈良朝を中心とした須恵器がまとまって出土し、また平安時代の住居跡も確認されている。5及び7も該湖の住居跡等が検出されている遺跡である。五科内小竹遺跡の対岸にあたる同時期のこれらの遺跡との関連性が今後重要なってくるものと思われる。10は該地での古代東山道とされているルートで、先に述べた旧中山道が碓氷川中位段丘面であるのに対して松井田丘陵上を道筋としている。2、3は中世末とされる小型の板碑で、3はこの地に居住した者の供養塔と考えられている。

〈参考文献〉

「歴史の道調査報告書～東山道～」群馬県教育委員会 1983

「松井田町誌」松井田町誌編纂室 1985

「五科山岸遺跡」松井田町教育委員会 1991

「松井田町遺跡調査会平成3年度総会調査書」

「土塹下原遺跡」松井田町埋蔵文化財調査会 1992ほか



- | | |
|----------|------------|
| 1 土塙下原遺跡 | 6 五科野ヶ久保遺跡 |
| 2 (土塙山口) | 7 五科新荷谷戸貳跡 |
| 3 (五科高墓) | 8 横川大林遺跡 |
| 4 五科山岸遺跡 | 9 白井7号古墳 |
| 5 五科平遺跡 | 10 東山道 |

図1 周辺遺跡の概要

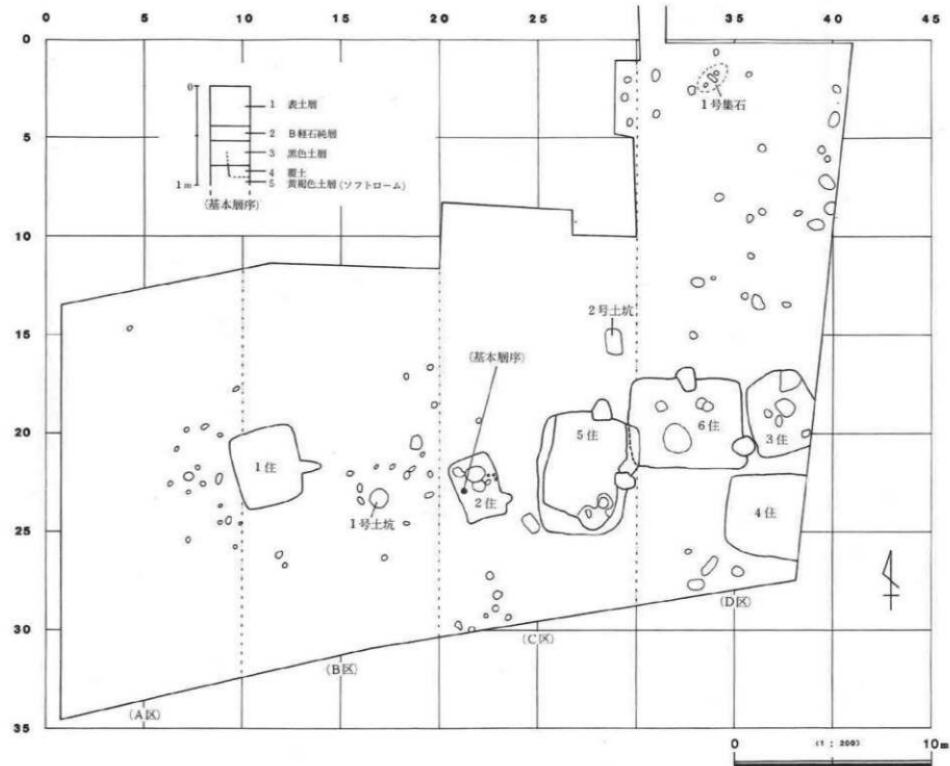


図2 五科丙小竹遺跡全体図

第4章 検出された遺構と遺物

I 繩文時代

〈1号集石〉

位置34-2 グリッド。形態大小計13個の自然礫で構成されている。これらは長さ40~60cmの柱状をなすもの3個と径20cm内外の(不整)円礫、それ以下のものからなる。石組みや規則的な配列は認められなく、また図示したように礫と礫の間には多いもので数10cmのレベル差で土が入りこんでいる。このようなことから本遺構は元位置が保たれていないものである。この中でセクションHとIにかかる中央付近の柱状礫2個は斜めに傾いているが本来は立石であったと考えられる。もう1個についても横倒しになっているが同様に立石の可能性がある。それ以外の礫のものについては不明であるが、付近には殆ど石の検出がないことから立石に伴う圓石的な性格を持つものと推察される。なお、掘り込みは検出されていない。遺物遺構精査時に打製石斧1点と縄文土器片1点が出土した。打製石斧は全長10cm、幅4.5cm、厚さ1.5cm、重量90gの完形品である。短冊形で刃部は両

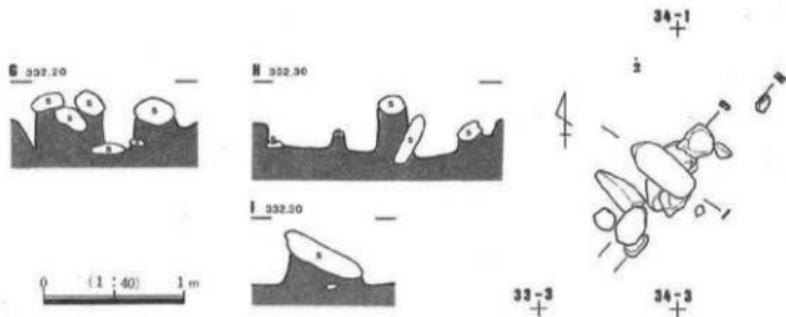


図3 1号集石



1号集石検出状況

丸刀を呈し使用による摩滅が認められる。砂質頁岩製。土器は丸みのある胸部片でR L甲筋斜縫又縦ころがしの地文に細い曲線が描かれており、中期後半に相当するとと思われる。

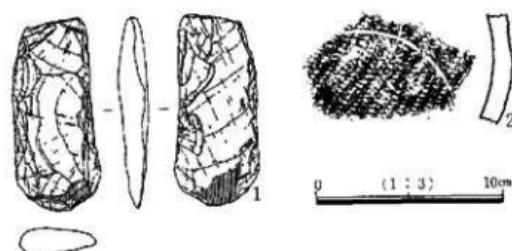


図4 1号集石出土遺物

〈遺構外出土遺物〉

土器（片）7点と石器3点を図示した。他に工具片数点と打製石斧片2点が検出されている。1～3、6は中期後半、4は纖維を含まない前期後半、5は前期末、7は後期前半にそれぞれ相当すると思われる。

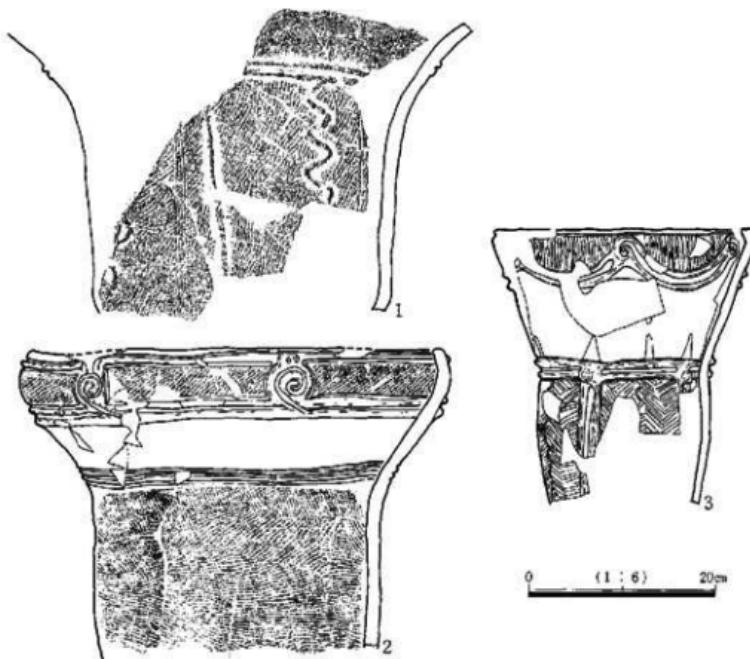


図5 遺構外出土遺物(1)

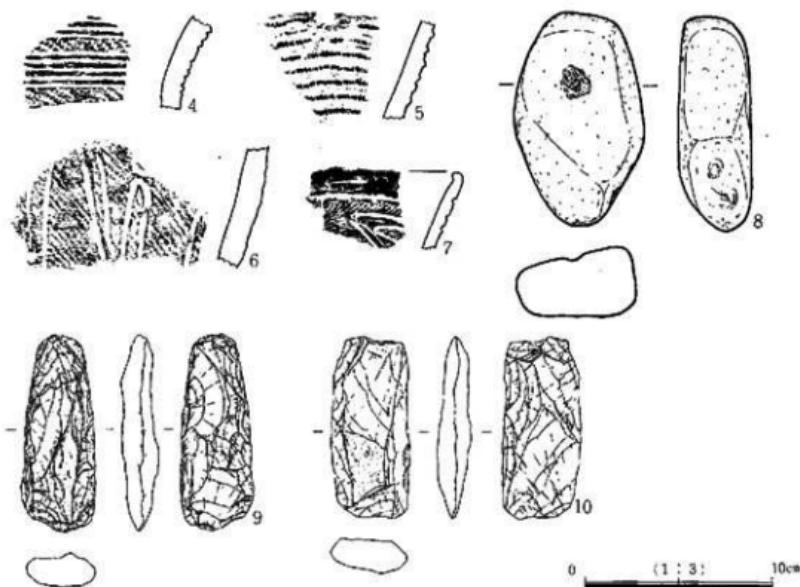


図6 遺構外出土遺物(2)

表2 遺構外出土遺物観察表

No.	器種	法量(cm)	形態・手法・焼成・他	色調	状況	出土
1 深鉢	口 —— 底 高 —— 略	並行する縦帶が頸部細文帯と胴部を区別。胴部は地文を縦文R L縱ころがしとし、部位降帯区画に平行文及び波線文を描く。	黄褐色	頸部片	38—8 G	
2 細鉢	口 43.0 底— 高 46.0	深いキャリバー形を呈す。口縁部は地文を単位で構成され縦X L R横ころがし。並行波線3条以下の胴部も地文にRで充填。	黄褐色	60%	32—2 G	
3 細鉢	—	弧状の並行縦帶による口縁部文様帯は内部に縦波線を2段描く。胴部は5区画で内部はH形状条縫中央に平行文が下す。	淡褐色	50%	37—3 G	
4	—	地文は横ころがしの縦文R Lで5本1単位のない集束波線が描かれる。焼成良好。	黄褐色	小片	5往復上	
5	—	細い斜帯上に細かいC字状連續爪形文の窓状で形成する。焼成良好。	赤褐色	小片	32—8 G	
6	—	地文L R縱ころがし上に波線文を描く。焼成良好。	暗褐色	小片	D 区 内	
7	—	沈底区画で細かな縦文部と磨消部を作出。内外面ともよく窓される。焼成良好。	黒褐色	小片	6往復上	
8 凹石	全長—11.4、幅—6.9、厚さ—3.7、重量—450g。凹みはさほど摩滅がない。	海石安山岩	完形	D 区 内		
9 打製石斧	全長—10.4、幅—4.0、厚さ—1.8、重量—98g。側邊は細かく剥離する。	砂岩	完形	B 区 内		
10 打製石斧	全長 9.5、幅 4.2、厚さ 1.8、重量 90g。全体に厚板。一部に原石面。	海石安山岩	完形	C 区 内		

II 平安時代

<1号住居跡>

主軸方位 N -80°-E

形 状 横長の隅丸長方形を呈し、南側は少々不整形で狭くなっている。

規 模 墓石端での計測で東西 3.3m × 南北 3.8m (中央付近) である。壁高は平均で約40cmが残存する。

重 複 なし。

カ マ ド 東壁中央南寄りに付設される。残存する煙道は長さ70cm、仕居壁部での幅は65cmを計り右側壁には自然円礫による構築状況が良好に残存。左袖部では地山を掘り残した突出が確認された。燃焼部は住居壁ラインから内側にあり、焚口よりボウル状に凹めた部分に燒土を含む埋土を施して火穴を形成する。

床 面 地山であるローム面を平坦に凹めて床面とする。中央やや西側には径約 1.2m 程の焼上化した部分が認められた。貼床の形跡は認められない。

土 坑 検出されない。

周 満 検出されない。

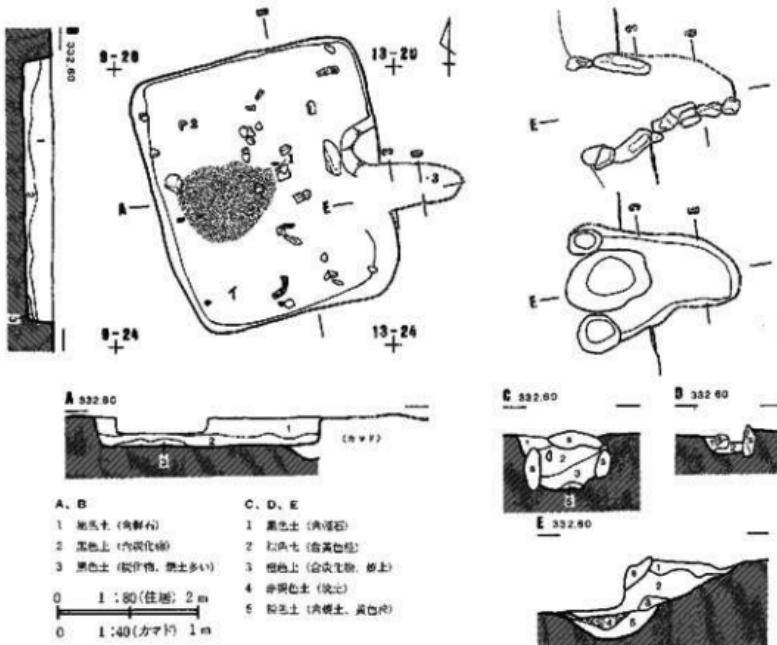


図 7 1号住居跡

遺物 腹上下位より酸化の須恵甕、杯のほか灰釉皿、須恵境、土師甕など30片種とともに炭化材及び石が全体に散在する。カマド内には灰釉焼片が出土した。

〈2号住居跡〉

- 主軸方位** N-70°-E
- 形 状** 横長の圓丸長方形。
- 規 模** 中央付近で東西 2.2m × 南北 3.3m、壁高は平均して約20cmが残存する。
- 重複** なし。
- カマド** 東壁南端に付設される。幅60cm、壁外へ20cm突出する半円形の掘り込みで床面から焚口そして燃焼部までフラットな面が徐々に煙道へと立ち上っている。覆土の大半は焼土であるが火床部分の赤変は殆ど認められない。また、袖部の形跡や構築材とされるものも認められていない。
- 床 面** 住居北側から中央にかけては地山のローム面を使用するが、南側ではロームがやや落ち込んでいるために黒色土牛を床面としている。貼床は認められない。
- 土 坑** 床面中央から北半分で4基検出された。P1は径33cm、深さ5cmで底面が広い。P2は径55cmで深さ10cmと浅いが南端に深さ26cmの小土坑を伴う。P3は径1mで瀧斗状断面の中央で深さ25cmを計る。P2とP3は上端で連結している。P4は住居北西コーナー近くに位置しており径30cm、深さ30cmを計る。上部ではコーナー側に浅い凹みを伴うがこれは土坑としてテンパリングしなかった。
- 周溝** 住居床面の北側に半周検出された。床面レベルで幅15cm~20cm、深さ5cmである。東壁中央付近では壁際の小土坑が造溝内外に見られる。
- 遺物** カマドに須恵環、土師环片、P1に土師甕片ほか住居覆土より数片が出土している。

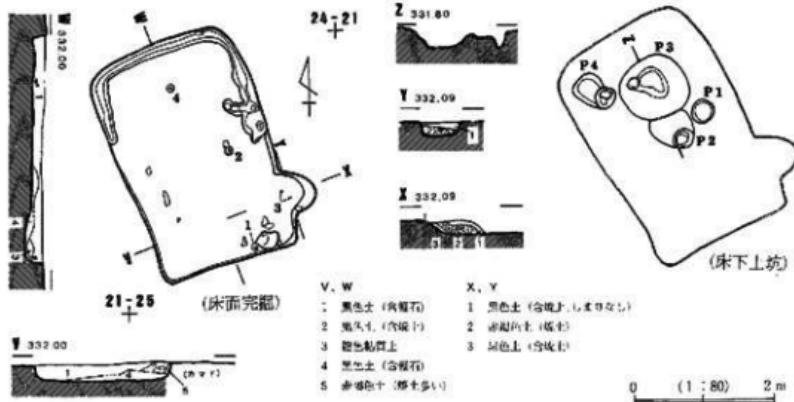


図8 2号住居跡

〈3号住居跡〉

主軸方位 N-73°E

形 状 横長の不整長方形と思われる。

規 模 東西は北壁際で2.6m、中央付近で3.6mを計り南側はさらに拡がると思われるが区域外のため不明。南北は突出した北壁中央で4.2mである。標高は平均約35cmが残存する。

重複 なし。

カマド 確認したプラン内には存在しないが、東壁と区域外の境界内側に焼土が認められるのでこれをカマドに伴うものとすると区域外に存在を推定できる。

床 面 ローム面を床面とする。貼床は認められない。

土 坑 床面で5基が確認された。P1は径45cm、深さ13cmで断面ボウル状、P2は径65cm×40cmの梢円形で深さ17cm、P3は径45cm~55cmの不整円形で深さ12cmと浅く、P2及びP3ともP1同様ボウル状断面を呈す。P4は径1m×82cmで長軸両端に床面からの深さ36cm及び46cmの小土坑を伴う。P5は壁から統く1.1m×95cmの不整形で中央での深さは35cmである。

周 溝 掘出されない。

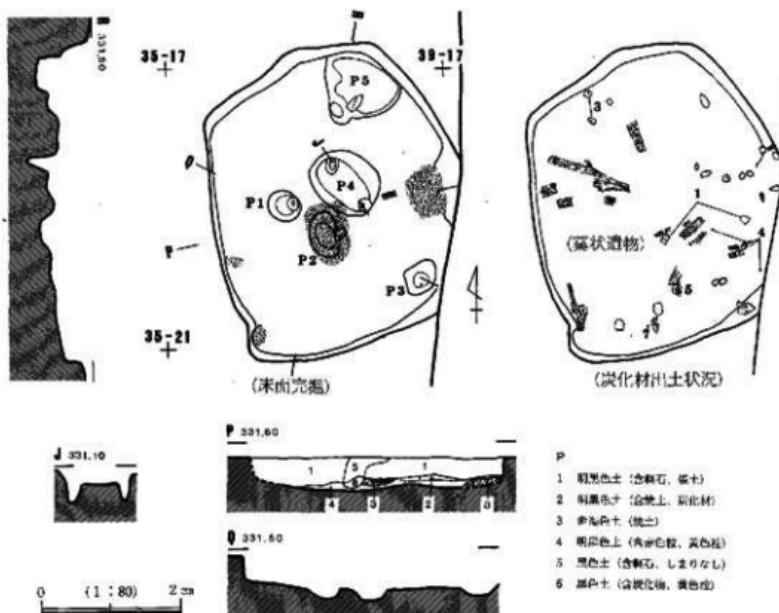


図9 3号住居跡

遺物 覆土上一下位にかけて須恵器、壺、塊、蓋片、土師甕、环片など、また灰釉陶、塊などが出でている。P 4 及び P 5 内部には土師甕片を伴う。床面付近では炭化材及び石材が散在し南西部では葉状の炭化物が出土している。

〈4号住居跡〉

主軸方位 不明であるがカマドを東壁と考えると N-95°-E である。

形狀 東側が又域外のため不明だが西側が狭い隅丸台形と思われる。

規模 東西は 4.0m が残存する。南北は西壁付近で 3.2m、区域界で 4.4m を計る。壁高は約 40cm。

重複 なし。

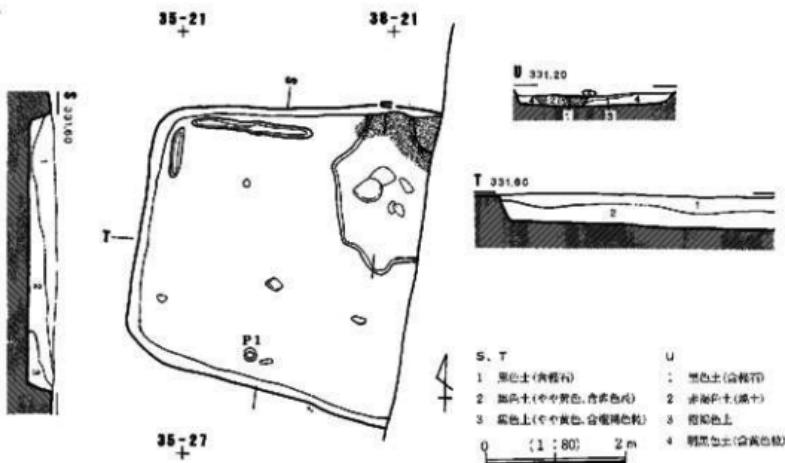
カマド 不明。

床面 ローブム面を床面とする。貼床は認められない。

土坑 土坑としてナンパリングしていないが北東部に不整形な浅い凹みがあり、また南壁際に小土坑 P 1 が存在する。不整形凹み部は南北 2.2m、深さ 15cm で底面は平坦である。覆土は主に黒色土だが床面から純く焼土層も見られる。図では内部に礫が示されるがこれは床面レベルにあり凹みに作るのではない。P 1 は幅 18cm、深さ 24cm を計る。

周溝 北壁と西壁の一部に壁より 10cm 程内側で検出された。幅 15cm、深さ 10cm 程である。

遺物 北東の凹み部分より須恵器片少々と土師甕 30 数片、覆土中より土師甕、須恵器、塊片等が出土している。



第10図 4号住居跡

〈5号住居跡〉

- 主軸方位** N-8°-E (北カマド) N-105°-E (東カマド)
- 形 状** 不整隅丸長方形で北カマドに対しては縦長、東カマドに対しては横長プランである。
- 規 模** 本住居は二重のプランが存在している。外側では東西 4.8m、南北 6.2m を計り内側プランは所々で40cm~1m程のテラス状部分を残して掘り込まれる。壁高は確認面からテラス部分までは40cm、さらに下延へは10cm~20cmである。
- 重 様** 6号と重複する。土層状況がいまひとつ不明ながら6号→5号と思われる。
- カ マ ド** 北壁中央と東壁中央に検出された。北カマド及び東カマドとともに自然円礫と板状石を正立させた構築状況がよく残り、焚口には崩落した天井石が確認された。火床はともに被火による赤変が顕著であり焼土も多く堆積していた。盛り込み及び石材の残存状況より北カマドは外側、東カマドは内側プランに伴うようであるが両者の前後関係は看取できなかった。
- 床 面** 先にテラス状とした面を上部床面、下面を下部床面とすると土層断面からは下面→上面と考えられる。ただ、カマドの前後関係が不明であり並存を否定できないことから下面が最終的な床面であった可能性も否定できないであろう。
- 土 坑** 2基検出された。P 1は径80cm、深さ26cm、P 2はコーナーより突出する径1m、深さ30cmの不整形プランで、ともに覆土には焼土及び炭化物を含む。
- 遺 物** 内側プラン内覆土を中心に遺物は多い。両カマドでは20数片、またP 1とP 2でも土師壺片などを伴っている。

〈6号住居跡〉

- 主軸方位** N-3°-E (北カマド) N-92°-E (東カマド)
- 形 状** 圓丸長方形を呈す。
- 規 模** 東西 5.8m × 南北 4.6m、壁高約40cmを計る。
- 重 様** 南西部分が5号と重複する。
- カ マ ド** 北壁中央及び東壁南寄りに検出された。北カマドは幅1m、長さ50cmの半円状突起が壁内から緩い弧を描いて立ち上がる。右側壁は構築石材を縦に並べた状況がよく残り、手前には天井石の崩落片が検出された。東カマドは幅90cm、長さ50cmの半円状で北カマドと酷似する。左側壁奥と右手前袖部に石材が正立し元位置を保っていた。両カマドともに覆土中一下位にかけて焼土がよく残るが、火床面が被火で赤変し土器片が多いことから最終的には北カマドが機能していたと考えられる。
- 床 面** ローム面を床面とする。貼床は認められない。
- 土 坑** P 1は径 1.5m で深さ50cmを計り覆土には焼土を多く含む。P 2とP 3はともに径50cm弱で深さは60cmと深い。P 4は僅かな凹みの小土坑である。
- 周 溝** 溝 北東コーナーで検出。壁や内側で幅16cm~20cm、深さ10cm弱を計る。
- 遺 物** 南カマド、P 1に土師壺片、他に住居覆土より工師壺片等百数十片が出土した。

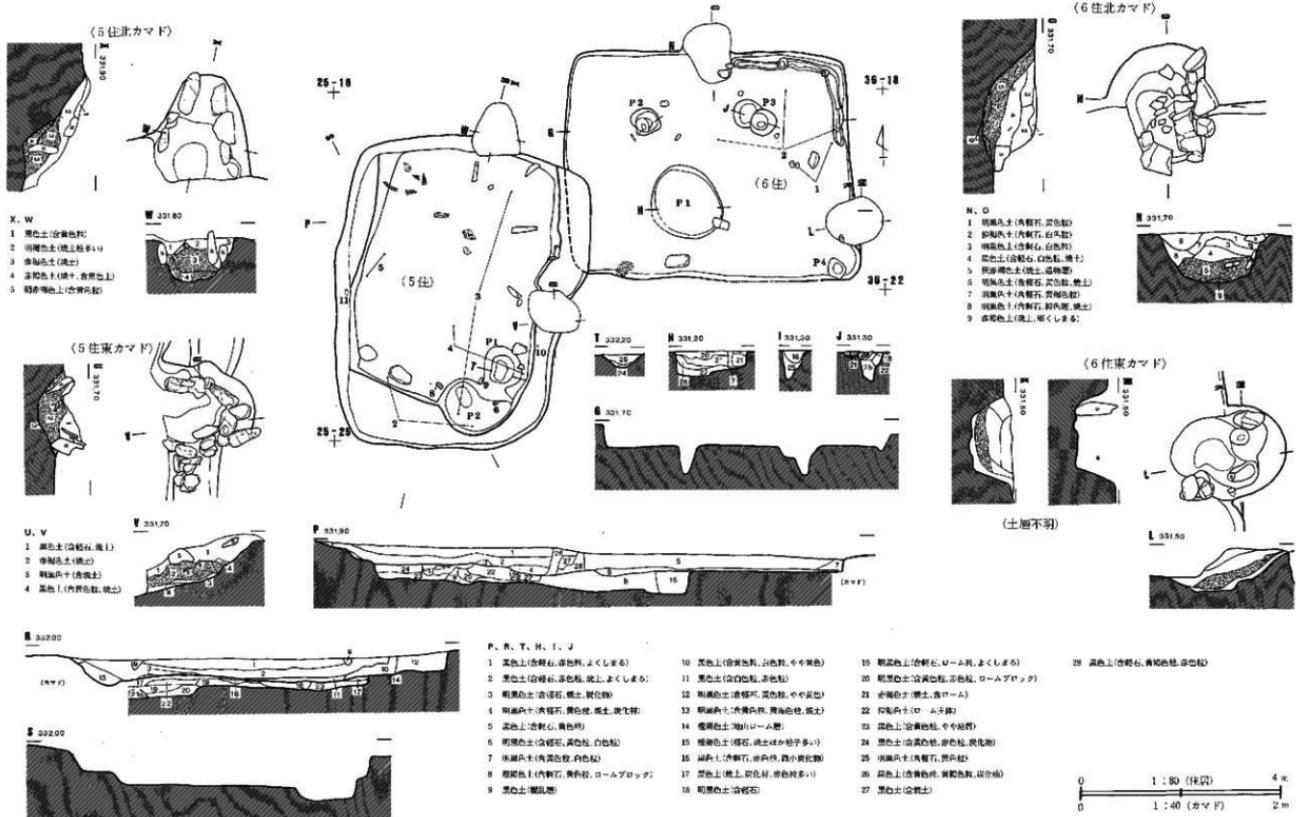


図17 5号住居跡・6号住居跡

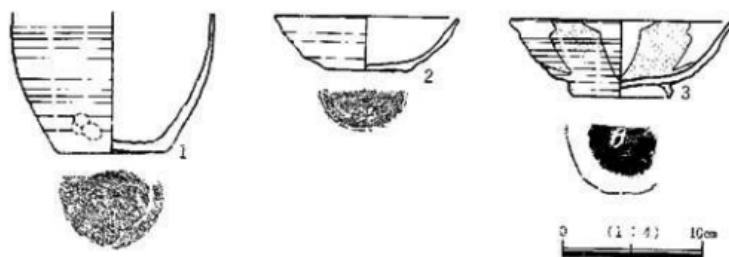


图12 1号住居跡出土遺物

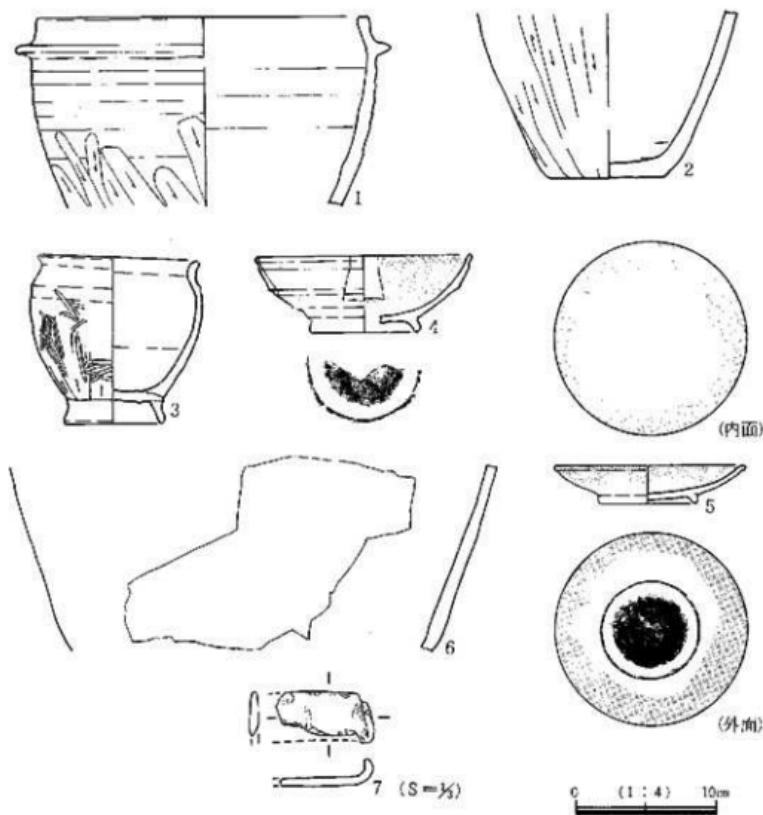


图13 3号住居跡出土遺物

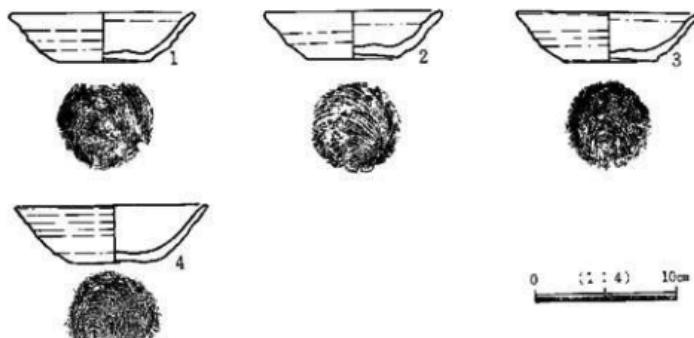


図14 2号住居跡出土遺物

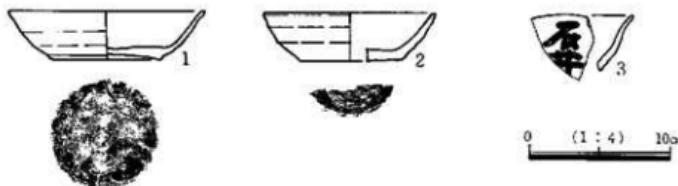


図15 4号住居跡出土遺物

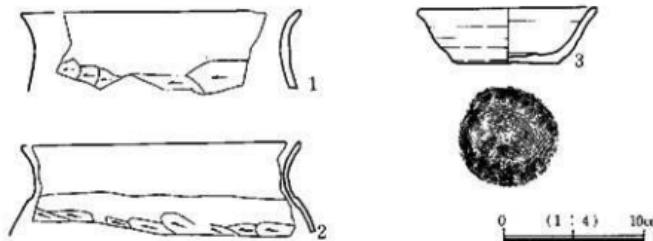


図16 6号住居跡出土遺物

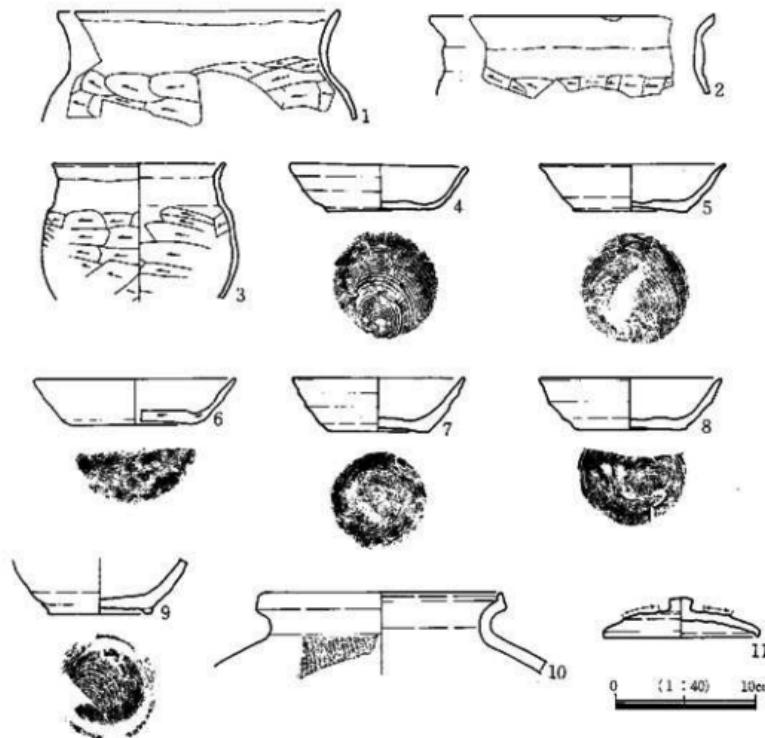


図17 5号住居跡出土遺物

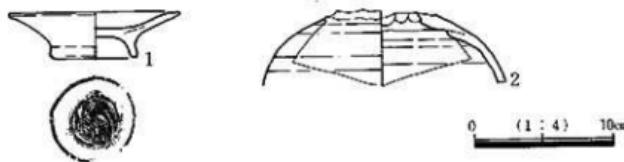


図18 遺構外出土遺物

表3 1号住居跡出土遺物観察表

N ^o	器種	法 尺(cm)	形 線・手 法・燒 成・他	色 調	残存	出 土
1 (灰陶)	口—— 底7.8 高—— 最——	全体に回転すり調査。底部右回転条切り無調査。酸化焼成。	橙褐色	30%	覆土下位	
2 (灰陶)	口(13.1) 底(5.8) 高(3.8) 最——	焼き跡まりのない盛んだっく。底部回転条切り無調査。	暗灰色	50%	覆土下位	
3 (灰陶)	口(15.7) 底(7.0) 高(5.4) 最——	底ははっきりした三日月高台で底部に舟切り痕は残らない。口部は盛かに外反。内面全体と口部外面の施釉はよく発色。焼成良好。	白灰色	40%	覆土上位	

表4 2号住居跡出土遺物観察表

N ^o	器種	法 尺(cm)	形 線・手 法・燒 成・他	色 調	残存	出 土
1 (灰陶)	口12.8 底5.7 高3.4 最——	口縁は外反気味に立ち上がる。胎土には全体に小穂が混じり相思。底部右回転条切り無調査。焼成不良。	灰褐色	80%	覆土上位	
2 (灰陶)	口12.3 底5.6 高3.4 最——	全体に厚手で形態は1と類似。底部は静止気味な回転条切り無調査。口縁内外面の施釉は炭化物の付着で黑色。焼成不良。	灰褐色	完形	覆土下位	
3 (灰陶)	口12.8 底6.6 高3.5 最——	1・2と同形だがやや薄手で全体に丸む。底部右回転条切り無調査。焼成不良。	淡褐色	完形	覆土下位	
4 (灰陶)	口(13.4) 底5.7 高4.1 最——	内湾気味に立ち上がる。底部右回転条切り無調査で口縁部以外は内外面黒色。焼成不良。	灰褐色	30%	覆土下位	

表5 3号住居跡出土遺物観察表

N ^o	器種	法 尺(cm)	形 線・手 法・燒 成・他	色 調	残存	出 土
1 (灰陶)	口23.5 底—— 高—— 最——	水平な内部で口縁部は内斜面取り。ロクロ整形後脚中央外面をヘラケズリ。酸化焼成。	淡褐色	50%	覆土上位	
2 (灰陶)	口—— 底(8.2) 高—— 最——	羽釜と思われる厚手の底部～体部下位。外側縁方向のヘラケズリ。焼成不良。	灰褐色	20%	覆土	
3 (灰陶)	口11.4 底7.0 高11.8 最12.2	合掌外反。口縁は少しき外反する小形實。ロクロ整形後、胴中位以下を板ヘラケズリ。焼成不良。	白灰色	80%	覆土上位	
4 (灰陶)	口(13.1) 底(7.5) 高5.4 最——	体部中位で内折気味に立ち上がる。底部は丸味のある擴三日月状。内面は底部を円形に残す他は施釉。底部は右回転条切り痕を中央に残す。	白灰色	30%	覆土下位	
5 (灰陶)	口13.5 底6.9 高2.7 最——	湾曲気味に大きく外傾する体部～口縁部。潰け掛けた施釉部は白濁して光沢なし。底部は条切り痕を完全にナデ消す。	白灰色	完形	覆土中位	
6 (灰陶)	口—— 底—— 高—— 最——	大型圓体部破片。タタキ及びアチ痕は全くなし。焼成良好。	灰色		覆土	
7 (灰陶)	長(5.1) 幅2.4 厚0.5 重(18g)	身部の一部のみ残存。一端が折れ曲がる。				覆土下位

表6 4号住居跡出土遺物観察表

No.	器種	法量(cm)	形・質・手法・焼成・他	色調	焼存	出土
1	环 (須恵)	口13.9 高3.4 底7.7 — — —	厚手の底部から体部は少々張りをもつて口縁外反。底部右回転条切り無調整。燒成良好。	灰色	80%	覆土
2	环 (須恵)	口(12.2) 高(3.4) 底7.7 — — —	口縁まで内済氣味に立ち上がる。底部右回転条切り後調節部ナダ。燒成良好。内外面に火摩が認められる。	灰色	20%	陶み部分 覆土
3	碗 (須恵)	口—— 高—— 底—— — — —	体部は丸味を含むがは外反する。外面に「石井」の墨書きあり。酸化焰焼成。	黄褐色	小片	覆土

表7 5号住居跡出土遺物観察表

No.	器種	法量(cm)	形・質・手法・焼成・他	色調	焼存	出土
1	甌 (土器)	口(20.1) 高—— 底—— — — —	肩上位は張りをもち、口縁部は済立氣味で上位で外反する。口縁部内外面横ナダで底部上位横ヘラケズリ。燒成良好。	棕褐色	口縁付近	北カマド
2	甌 (土器)	口(20.2) 高—— 底—— — — —	よくナデられたコの字状口縁部。肩上位は横ヘラケズリ。燒成良好。	棕褐色	口縁付近	下山床直
3	甌 (土器)	口(12.2) 高—— 底—— — — —	脚(?)に最大径をもつ薄手の小型甌。口縁部内済氣味に立ち上がり上位で短く外反する。外周側ヘラケズリで内面横ナダ。燒成良好。	棕褐色	30%	下山床直
4	环 (須恵)	口12.5 高3.1 底7.6 — — —	体部やや張りをもち口縁はそのまま外反。底部右回転条切り無調整。燒成良好。	灰色	80%	覆土下位
5	环 (須恵)	口13.3 高3.2 底8.0 — — —	全体にシャープなつくりだが焼き締まりはなく軽量。底部右回転条切り無調整。	白灰色	75%	覆土上位
6	环 (須恵)	口(14.2) 高3.2 底8.6 — — —	広い口縁から口縁まで直線的に外傾する。底部回転条切り無調整。焼成、つくりとも全体に難である。	白灰色	40%	覆土中位
7	环 (須恵)	口12.3 高3.8 底9.2 — — —	体部は直線的に外傾する。底部右回転条切り後部分的に折ナダ。燒成不良。	棕褐色	70%	東カマド
8	环 (須恵)	口13.1 高3.7 底8.0 — — —	体部は少々膨らみをもち口縁短く外反。底部右回転条切り無調整。燒成良好。	灰色	60%	上面床直
9	碗 (須恵)	口—— 高—— 底7.4 — — —	低くて短い台部。底部右回転条切り後合掌貼りつけ。燒成・調整とも非常に難。	白灰色	20%	覆土上位
10	甌 (須恵)	口(8.5) 高—— 底—— — — —	底部は強く凹れ、口縁部は外反し口縁外面に半円面を持つ。底部に平行タタキ目が残る。	灰色	口縁部片	覆土上位
11	蓋 (須恵)	口10.9 高2.8 底—— — — —	小形の蓋で張りをもたない。天井部外周ヘラケズリ。燒成良好。	灰色	光形	上面床直

表8 6号住居跡出土遺物観察表

No.	器種	法量(cm)	形態・手法・焼成・他	色調	残存	出土
1	甕 (上部)	口(19.8) 底 高 最	口縁部内外面横ナギ。肩部上位横ヘラケズリ。焼成良好。	褐色	口縁付近 本面直上	
2	甕 (上部)	口(19.8) 底 高 最	口縁部内外面横ナギ。肩上位横ヘラケズリ。焼成良好。	褐色	口縁付近 覆土下位	
3	甕 (須恵)	口12.5 底 7.1 高 3.9 最	体部に張りをもち口縁は外傾する。全体に歪み、焼成も不良。 底部右回転糸切り無渦巻。	灰色	完形 覆土	

表9 遺構外出土遺物観察表

No.	器種	法量(cm)	形態・手法・焼成・他	色調	残存	出土
1	瓶 (須恵)	口11.8 底 5.9 高 3.3 最	台部は狭く足高気味。中央に右回転糸切り底が残る。焼成良好。	灰色	50%	覆土
2	甕 (須恵)	口— 底— 高— 最—	球形の肩部は外面全体に白濁した自然釉が付着する。頸部との境は内面に指押えがよく残る。焼成良好。	灰色	肩部 片	覆土

III その他

調査区の全域より土坑が検出されている。これらはA区中央、B区中央、C区南端、D区全域とある程度の群をなすが個々においての規則性は認められない(図2)。またその時期については他の検出構造と同一面での確認であるが覆土や遺物等からは判断できなかった。区19ではこのうち明確なプランをもち規模の大きい2基を1号、2号として示す。

〈1号土坑〉(図19-左)

B区中央の17-23グリッドに位置する。
径約1mの円形で広い底面は中央で深さ18cmを計る。遺物は全く検出されない。

〈2号土坑〉(図19-右)

C区内外29-15グリッドに位置する。形状は隅丸長方形で1m45cm×90cm、深さは10cm程度で浅い。覆土からは数箇の縛小片が出土している。

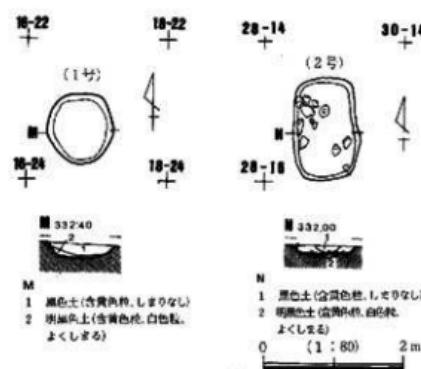


図19 1号土坑、2号土坑

第5章 まとめ

今回の調査及びこれにかかわる問題点について右下の考察を加えてまとめとしたい。

調査は、工場建設に伴う事前調査であり、該当地全域にわたってトレンチ掘削による遺構分布状況の把握と遺構検出部分の全面調査を実施して、遺跡の全容解明につとめた。

確認された遺構と遺物

縄文時代 遺構 集石遺構1

遺物 縄文土器、石器

平安時代 遺構 住居跡6

遺物 土師器、須恵器、灰釉陶器、鉄器

時期不明 遺構 土坑2、ピット多数

本遺跡は、碓氷川右岸地域で五科以西における数少ない調査例として、該当地域における歴史復元作業に貴重な資料を提供した。本遺跡から見た、碓氷川右岸における他地区での調査状況は、上毛越自動車道建設工事に伴う発掘調査等による東側の行出地区と、西側の原地区までの間の資料が全くない。碓氷川左岸も含めた周辺遺跡での確認状況では、縄文時代前期から平安時代までの遺構遺物が検出されている。

本遺跡における縄文時代にかかわる遺構は集石遺構のみであった。この遺構の性格については、立て石を作りものと考えられ、該当期における精神的侧面の反映としてとらえたい。本遺跡は、奇岩名勝の妙義山の麓にあり、更に西には浅間山がそめる立地となっている。なんらかの祭祀的特徴も見いだすことができるが、本遺構との関連については言及を避けたい。また生活の拠点としての集落については、遺物の分布状況では調査区内の東半部分で確認できることから、東側調査区域外における分布の可能性について指摘しておく。今後の開発等による該当地の扱いに注目したい。

平安時代の竪穴住居跡は6軒が確認されているが、うち、カマドを確認できたもの4軒、確認できないものが2軒となっている。カマドが確認された住居跡でみると、全てが東側に設置されうち2軒は北側にカマドが付設されている。該当地での自然環境では、強い西風があり松井田町における他の遺跡で確認されている状況と同じ傾向が見られている。カマドが確認されていない2軒についても東側が調査区域外に残っているためカマドが付設されている可能性が強い。住居跡の分布状況からすると、調査区の西及び東に向けて集落の広がりが予想され、今後の調査に期待するところが大きい。

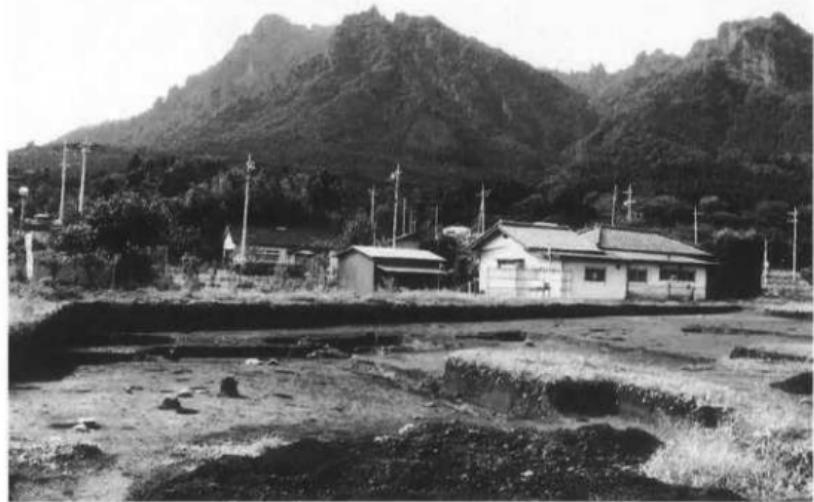
発掘調査報告書抄録

ふりがな	ごりょうへいおだけいせき
書名	五科丙小竹遺跡
副書名	
巻次	
シリーズ名	松井田町埋蔵文化財調査会報告書
シリーズ番号	(3)
編著者名	水澤 祝彦、田口 修
編集機関	松井田町埋蔵文化財調査会
編集機関所在地	郵739-02 群馬県碓氷郡松井田町大字新堀245
発行年	西暦1993年3月31日

所収遺跡名	所在地	コ	北	東	調査期間	開査面積	調査原因
		市町村	緯	経			
五科丙小竹遺跡	松井田町 大字五科	104019	36°19'15"	139°41'65"	1991.08.20- 1991.10.19	1,030m ²	工場建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
五科丙小竹遺跡	住居	平安前半 縄文中期	堅穴式住居 集石造構	土器 土器、石器	

写 真 図 版



遺跡地より妙義山を望む

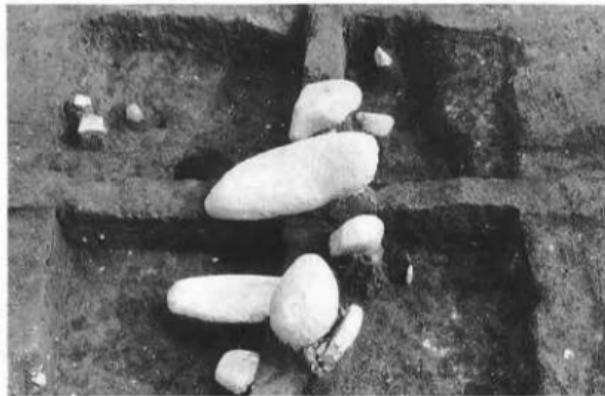


表土除去

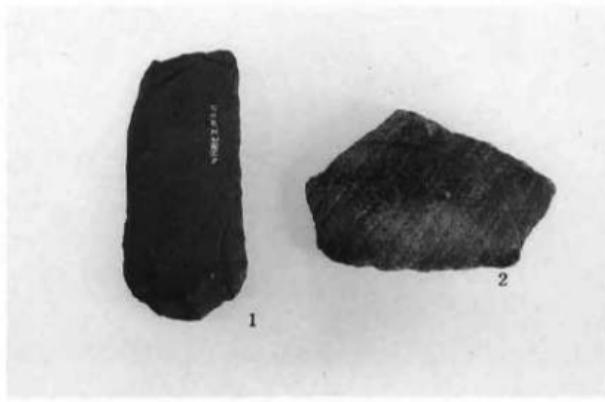
図版 2



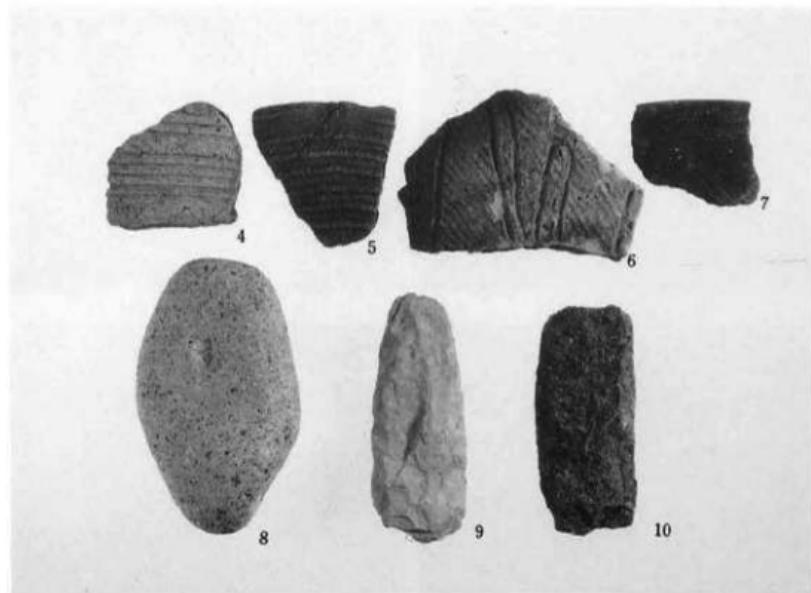
1号集石と妙義山(東より)



1号集石(南西より)



1号集石部出土遺物



図版 4



1号住居跡(西より)



1号住居跡カマド



1号住居跡カマド



2号住居跡床面(西より)



2号住居跡掘り方(西より)



2号住居跡カマド



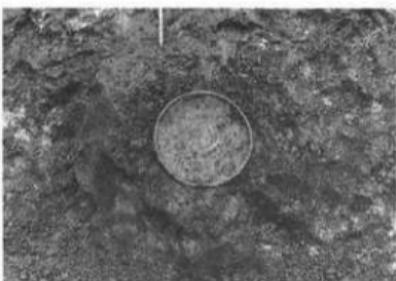
2号住居跡遺物①出土状況



図版 6



5号住居跡上面遺物出土状況(南東より)



5号住居跡上面遺物(II)出土状況



5号住居跡下面遺物出土状況(東より)



同 左(北東より)



同 上(西より)



5号住居跡完掘(南より)



5号住居跡北カマド



5号住居跡東カマド



6号住居跡完掘(西より)



6号住居跡北カマド付近(南より)



6号住居跡北カマド東壁内部



6号住居跡東カマド



A区ピット群(南より)



B区ピット群(南より)



C区2号土坑(西より)



D区北側ピット群(南より)

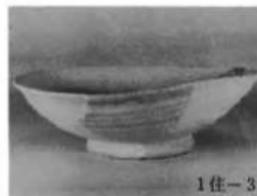
図版 8



1住-1



1住-2



1住-3



2住-1



2住-2



2住-3



2住-4



3住-1



3住-2



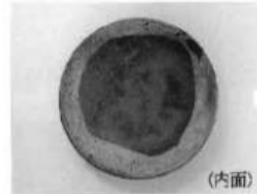
3住-3



3住-4



3住-6



(内面)



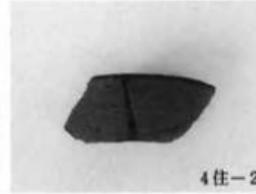
4住-5



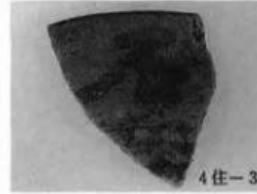
(外面)



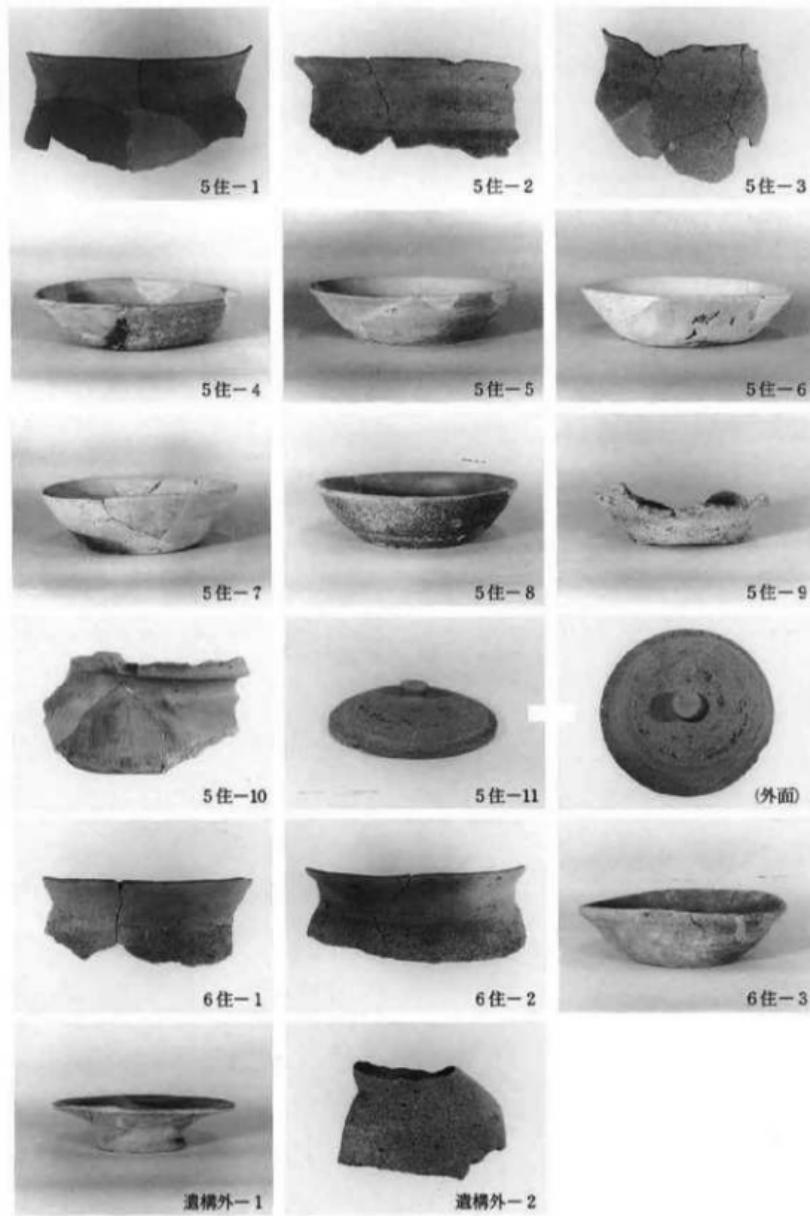
4住-1



4住-2



4住-3



松井田町埋蔵文化財調査報告書〈3〉

五 料 丙 小 竹 遺 跡

平成5年3月31日発行

編集・発行 / 松井田町埋蔵文化財調査会
(教育委員会内)

〒379-02 群馬県碓氷郡
松井田町新堀245

T E L (0273) 93-1111

印 刷 / 確 水 印 刷 株 式 会 社